1990年8月25日（日）　神戸新聞掲載

〝平和の使者〟土ハトフンにご注意

神戸市の研究技師が因果関係解明

堆積すれば奇病のもと

死亡率の高い奇病「クリプトコックス症」の原因とされるカビの一種「クリプトコックス・ネオホルマンス」が、乾燥した土ハトの堆（たい）積フンの中で繁殖、大気中に拡散され呼吸器官を通して発病させているメカニズムを神戸市環境保健研究所疫学部の戸矢崎紀紘（のりつな）技師（31）が十三年間の地道な研究の末、解明した。戸矢崎技師はこの研究でこのほど関西医科大から医学博士号を授与される一方、研究成果に基づいて同研究所は公共機関や神社などから堆積フンを除去するなどの対策を市の関係部局に要請した。

群がる平和の使者。乾燥した堆積フンは要注意だ＝神戸市内

博士号を授与された戸矢崎紀紘技師＝神戸市環境保健研究所

こまめな除去必要

医学博士号授与　13年間の地道な研究実る

戸矢崎技師の博士論文は「病源性真菌クリプトコックス・ネオホルマンスに関する研究について」と題するもので、昭和五十二年に神戸市立中央市民病院から、クリプトコックス症の疑いありとされた患者の髄液検体が持ち込まれたことがきっかけになった。

クリプトコックス症は日本では年間五十例ほどを数え、初感染病巣のほとんどは肺。初期症状は激しい頭痛、めまい、おう吐などが見られ中枢神経が侵されると、死亡率が高い。

菌そのものは自然界に存在するが、どういう条件下で増殖するかが問題だった。同技師は当時から疑わしいとされた土ハトのフンを徹底的に調べることにし、神戸市内の公共機関や神社などからサンプルを採取、菌液をつくり出し、ネズミの皮ふに副じん皮質ホルモンを塗って抵抗力を弱めたうえに菌液を接種するという方法で潰瘍（かいよう）を作り、菌がクリプトコックス症を引き起こすことを確認。菌が糖に反応する性質を利用して、サンプルを分析し、持ち込まれた患者の検体と同じであるかどうかを確かめた。

この結果、クリプトコックス・ネオホルマンスは土ハトの乾燥した堆積フンでのみ増殖することを突き止め、飛散した菌が人間の呼吸器官から体内に入って肺で初発病巣をつくり、さらに血管を通って最終的に脳の中枢神経を侵す一連のメカニズムを解き明かした。

特に、それまで不明だった菌の死滅温度や乾燥に対する強さ、アルカリ性のフンの中でどれぐらい生き延びられるのかなど、豊富なデータを使って解明し、乾燥フンと病気との因果関係を立証した点に専門家の評価が集まった。

戸矢崎技師は「だれもやらなかったことを私がただコツコツとやっただけ」と控えめだが、「風通しのあまりよくない駅のような場所ではハトに巣を作らせないような対策が必要だと思う」と話す。

同研究所の松田良夫疫学部長は「市民生活に結びつくテーマとして取り組んだ結果が博士号になり、大変喜ばしい。ハトそのものは除去できないが、二カ月以上堆積しているようなフンの除去を徹底していきたい」と話している。

有限会社　悠々工房
電話　046-271-2730　　FAX　046-271-2731